

womanてらす



シナ布 (山形県)

遠い縄文時代に、人間がまとっていた布の一つがシナ布だといわれています。原料は山間部に自生するシナノキなどの樹皮。かつては野良着として、またアイヌの織物「アットウシ」として人々に利用されていました。

木の自然な色と香り

樹皮の採取はちょうど今ごろ、梅雨時期に行います。シナノキを伐採して内皮と呼ばれる薄い鞣皮を剥ぐ。それを灰汁で煮て、洗い流してから糠に数日漬け込みます。すると発酵作用などによって白く柔らかな皮になります。それを洗って乾燥させると、長期間保存可能な糸の原料となります。これを細かく裂いて、「シナ績み」という技法で糸を紡ぐ。織物にするまで1年近くかかります。

こうしてできたシナ布で帯を作りました。改まった場には向きませんが、木の自然な色合いはコーディネートしやすく、さまざまな場で活躍します。木由来の香りも良く、

使うほどにつやが出て味わいが深まってくるのが魅力。シナ布の持つ張りを生かしてお太鼓をふわっと作るとよいでしょう。着用する前には霧吹きで水分を含ませておくと帯結びが楽です。着用後も結び跡にたっぷりと水分を含ませ、手アイロンをしておきましょう。しまうときは緩やかに巻いておくと畳み跡がつきにくくなります。

現在シナ布が作られているのは、山形県などの一部の地域だけ。その職人がこう言っていました。「伐採から布になるまでの一連の作業に深く関わると、自分も自然の一部であり、自然に対して常に謙虚であらねばならないという



山形県のシナ布の帯。着物は山形の紙糸紬(かみいとつむぎ)

気持ちになる」と。シナ布に込められた大切なメッセージを次世代にもつなげていきたいと思います。

(田中陽子・「暮らしのクラフトゆずりは」店主)

〈第4金曜日掲載〉